# 自然の先にある
# 島の手仕事

Nature and Craftsmanship of the Island

石垣市

# 自然の先にある島の手仕事

自由であること。
すぐそこにある自然と、よきパートナーであること。
暮らしの喜びであること。
好奇心あふれる挑戦者であること。

今も昔も島の手仕事は、
私たちの暮らしのあり方を示す鏡のように
丹念に育まれてきました。

これまでも、これからも
力強い個性と美しい自然と共に。

To be free.
To be a good partner with the nature next to us.
To feel joy in the living.
To be a challenger with full of curiosity.

Then and now, the island's craftsmanship
has been carefully fostered
like a mirror which shows how our living is supposed to be.

Until now and from now on,
we'll live with beautiful nature of
hearty uniqueness.

***Thanks Island*** — our craftsmanship

Contents

# もくじ

## 森と手仕事 …… 8

森の豊かさを子どもたちの未来に …… 10

地元の島材を暮らしに。それが自然なこと …… 14

## 草木と手仕事 …… 16

庭に生える苧麻を績み、地域・伝統をつなぐ …… 20

## 土と手仕事 …… 24

自然な流れの中にある半農半陶の暮らし …… 26

島を見つめ直し、新たな魅力に気づく …… 28

## 暮らしと手仕事 …… 30

平和を願いながら作り続けて58年 …… 32

豊かな時代における手仕事の価値 …… 34

長く使い続ける心を絶やさずに …… 38

感謝の念と共に受け継がれる三線の精神 …… 40

新たなスタイルを創り、技術を継承する …… 42

# 森と手仕事

Forest and craftsmanship

テリハボク、センダン、ガジュマル、オガタマ、ギランイヌビワ……。
これらはすべて、石垣島に生息する木の名前。
その数、なんと70種類以上！
独特で、力強い島の木々は
かつて島の生活道具に形を変えて
私たちの暮らしと共にありました。

森の名人 戸眞伊（とまい）さんには夢があります。
「いつか、島の木で子どもたちの学習机を作りたい」。
島の木に触れ、森に学び、島を知る。
木々のぬくもりは、
私たちにたくさんのことを教えてくれます。

Calophyllum inophyllum, Melia azedarach, Ficus retusa,
Michelia compressa, and Ficus variegata...
All of them are names of trees grow in Ishigaki Island.
Its variety comes to more than 70!
Unique and hearty Island's trees have been used
as housewares in different forms
and have been close to our lives.

The craftsman of the forest, Mr. Tomai has a dream.
"I have a dream to make desks for children with Island's woods."
By touching Island's trees, they'll know from the forest and know about the Island.
Warmth of trees
teaches us a lot of things.

多彩で美しい木目をもつ島材の数々（戸眞伊さん作成）。

# 森の豊かさを子どもたちの未来に

トマイ木工所　戸眞伊（とまい） 擴（ひろむ）さん

## 使われなくなった島材

かつて島の生活道具はすべて島の木、島材で作られていました。家も、タンスも、椅子も、学校の机も、すべてです。それが日本に復帰後、島外で作られた量産品がどんどん入ってきたものだから、これまで島材で家具を作っていた人たちがみんな、販売側にまわりました。山から木を切ってきて作るのは大変ですからね。それだけでなく、木材も規格サイズの輸入品が増えていったことで、「島の木は使いにくい」と判断されるようになったんです。今では、島材を使う事業者は僕を含め、ごく少数です。

## 島の生活文化に寄り添う道具づくり

八重山から始まった木工の技術というものはありません。昔、２００年くらい前でしょうか、こっちのお金持ちが沖縄本島や九州から大工を呼んで、タンスやら何やら家具を作らせていましてね。そのうちにこうした大工たちが八重山に住み着くようになりました。そんな具合でいろいろなところから技術が入ってきて、戦前あたりからは島内にも木工所ができ始めたんです。

僕はもともと西表島の船浮（ふなうき）出身で、戦後、中学卒業を機に石垣島の田城木工所に弟子入りしました。当時、田城木工所は馬車、さしもの、鍛冶、製材。この４つの事業を営んでいましたが、僕はさしものを専門にしました。その頃は、八重山では何をするにも馬車を使っていたので、馬車職人は重宝がられていましたね。しかし、その後、車社会になると馬車事業は廃業に追いやられ、職人たちはさしものを学び直して独立していきました。

本土で「ねじり組み」と呼ばれる技術も学びました。これは琉球政府時代に、もっと八重山のさしもの技術を発展させようということで政府の援助で田城木工所の２代目が研修生として大分に派遣され、持ち帰った技術です。接着剤も使わずにねじりながら木と木を組むもので、一度組むと、もうはずれません。とても難しい技術です。

現在は島材を使って、家具などさしものの他に、端材を使ったひきものも作っています。注文で一番多いのがテーブルですね。先日は、お嬢さんが結納でお婿さんと一緒に島に戻ってくるから、その時にぜひ島材の家具で迎えたいということで、センダンという島材を使った机を作りました。親の心ですね。

織物の道具も作っています。織物事業振興の一環として、役場からの依頼で織機を作るようになりました。染織用具もたくさんありますので、それらも作らないといけません。

織物の道具も進化しています。織り手の満足いくものができるように一生懸命考えます。もうずいぶん前になりますが、「小綛（こがせ）取り器」

という、八重山上布の括り染めの緯(よこ)絣(がすり)をつくるための用具も開発しました。5ミリ単位で幅が自由に伸びるもので、緯糸を手早く巻き取ることができます。沖縄本島でも八重山上布の講習会がある時にはこれが使われてきたので、本島の方にも何個か渡っているはずです。

績(う)んだ糸を入れる箱「すくい」は八重山の人が嫁に行く時に作って持っていきました。これは八重山独特の技術です。

サバニ舟をこぐ時に使うウェーク(櫂(かい))も、島材であるモッコクで作ります。この木は本当にすばらしい。島材の王様だね。これを使ってどうすれば速くこげるか、ずいぶん研究を重ねたものです。

## 島材を活かす知恵の伝承

八重山には70種以上の木があります。独特の美しい木目と硬さが特徴で、それぞれ目的によって使い分けています。これらをまだ頭に記憶しているうちになんとか残そうと、近年、表を作成しました。これを使って若手に島材のよさを伝えていこうとしています。たくさんの種類がありますので、使い分ける目が育たないと、その違いが分からない。

それと、島材を使う技術。今の人たちは機械頼りで手仕事の道具をあまり使わないんですね。でも道具の使い方を学ぶことで木を知り、初めて八重山の木を使えるようになる。一番大事なのはカンナです。便利な機具もいろいろと出てきてはいますが、カンナだけはそうはいかない。きめ細かな仕事をやろうとすると、僕の場合は機械だけでは納得できない。機械だと強引に削るからどうしても粗くなってしまう。それで僕は最後に手で丁寧に仕上げるようにしています。

島材は硬いので、八重山独特の「押しカンナ」の技術があります。島の木を使う上で、この技術はなくてはならないもの。だから絶対に忘れてもらいたくない、そんな想いでこの技術の講習も行っています。

## 足元財の活用が豊かさと循環を育む

島の木が使われなくなって、森が変わりました。昔は山の中に入っておやつがわりに実を集めて食べたものです。いくらでもありました。ところが今は、実があまり落ちていない。森が活性化していない印象です。山に入る人がいなくなって、使われない木はどんどん老朽化しています。それであまり花も咲かず、実がつかなくなり、その実が落ちなければ新しい芽吹きもない。島材が使われないと、森も悪循環になってしまいます。森だけではありません。あくまで僕の考えではありますが、山が潤っていれば、実や葉を食べる動物や虫がいて、豊かな土壌が育まれる。そこに雨が降って、よい養分が海に運ばれれば、海の活性化にもつながる。島での自然な暮らし方の中に、豊かな循環があるということを分かってもらいたいな、と思います。

このことは島の子どもたちの未来のためにもとても大事なことです。このままでは山がどうなっているのか、海がどうなっているのか、木がどうなってしまう。だから子どもたちにも僕ができることをちゃんと伝えていきたいと思っています。

| | | |
|---|---|---|
| 3 | 2 | 1 |
| 5 | 4 | |

1.2.3　更地にするために伐採が決まっている雑木林に許可を得て入り、活用価値のある島材にマーキングをしていく。

4　八重山独特の技法である押しカンナで仕上げる。通常のカンナは引く力を利用するが、島材は硬いため体重をかけながら下に向かって押して削る。

5　ねじり組みの技術を使い作製した箱。木の特徴をみながらデザインを考える。

# 地元の島材を暮らしに。それが自然なこと

うえざと木工　東上里（ひがしうえざと） 和広（かずひろ）さん

## 今こそ、もう一度 島の木材を見直す時

木工の仕事を始めた頃からずっと島材（島の木材）を使いたいと思っていました。目と鼻の先に豊かな資源があるのに、なぜ僕らは地球の裏側の木材を運んできて使わないといけないのか、と。しかし現実的には、今、島内で使用されるほとんどの木材は、島外からの合板、輸入材です。本来、地元にあるものを地元で消費するということは、誰が見ても理にかなっているし、一番自然なこと。山を守るという意味でもやっていかなくてはいけないと考えています。

この想いは、小さい頃に大工だった父から島材を使った家具の話を聞いて育ったことも、大きく影響しているかもしれません。

今、島材のことを技術と共に熟知しているのは戸眞伊さん以外にいません。数年前に、今のうちにそれらを受け継いでおかないと子どもたちに伝え残していくことすらできない、という危機感をもちました。それで、動いたんです。戸眞伊さんのもとに技術継承のお願いをしに、何度も通いました。それと同時に、島中の木工業に携わる事業者を一軒一軒訪ねて回り、同じような想いをもつ人々を募りました。こうして立ち上げたのが、「モッコク会」です。戸眞伊さんをリーダーに、12、13人の若手事業者で構成されています。

立ち上げたはいいけども、最初のうちは何をどうしたらよいか分からなかった。それでも毎月集まって、みんなで話を重ねているうちに、やるべきこと、やりたいことが段々見つかってきました。今年、3年目に入ったところですが、ようやく意識がまとまり始めてきたな、と感じています。

何事もいきなりは変わらない。できることから、一つひとつやっていく。そうやって少しずつ前進していけたらいいですね。

## 目指すは 地域のコミュニティ

現在は、戸眞伊さんと一緒に森に入って木について学んだり、技術を教わったりしています。島の子どもたちに向けたワークショップにも積極的に取り組んでいます。戸眞伊さんが習得してきた知識と島の技術をここで途切れさせないために、僕たちがしっかり勉強して、それをつなぐ。昔のようにすべて島材を使うということは難しいけれども、それぐらいのつもりで頑張っていきたいです。

島の資源は木材だけでなく、土や草木など多様です。そして、それらを使った知恵や技術もある。地元には、こうした島のものにもっと触れたい、知識を深めたいと思っている人がたくさんいます。僕らもまだまだ勉強の途中ですが、将来的には、あんつく、染め物、木工、焼き物……そういった島の手仕事が体験できるような地域のコミュニティをつくっていきたいと思っています。地元のお年寄りや技術をもっている方がどんどん参加したくなる、にぎやかなコミュニティ。家族みんなで来て、楽しい思い出が残って、また次も！というサイクルができていくと、大人も子どもも、じいちゃん、ばあちゃん、みんながもっと元気で豊かになると思う。そこに観光で訪れた方も加わってみんなで盛り上げていけたら理想的ですね。

便利になり過ぎてしまった今、島の未来の子どもたちに何を残していくべきか。しっかり考えていかないといけないと思っています。

| | |
|---|---|
| 1 | |
| 3 | 2 |
| 5 | 4 |

1.2.3　ワークショップで木材について学ぶ子どもたち。

4　「島の木のことは何でも知っている、すごい大工さん」と戸眞伊さんを紹介する東上里さん。

5　うえざと木工では、島材をもっと身近に感じてもらおうと、小物の製造、販売も行う。

# 草木と手仕事

Vegetation and craftsmanship

かつて、おばぁが糸を績(う)む姿は島の原風景でした。
若い頃に機(はた)に座って織りをやり
年月が過ぎていよいよ織れなくなると
機をおりて、娘のために糸を績む。
こうした長い時間の中で、織りやすい、よい糸は生まれます。

糸の材料は、島で育つ苧麻(ちょま)という植物。
苧麻を育て、績み、自然の恵みで染め上げる。
そして、織り上げられた上布は
清らかな海でさらされます。

人と人、自然と人をつむぐ。
豊かで美しい島であることを誇りに
島の手仕事は受け継がれていきます。

Once a grandmother, affectionately called as Obah, was sitting to spin.
It is an indelible scene of one's childhood.
When she was young, she sat at a weaving machine to weave.
As time passes, when a day has come she can not weave anymore,
she's got off the machine and spins for her daughter.
As time flows, for a long time,
we've found good and easy-to-weave threads.

Material of threads is a plant grows in the Island, called Boehmeria nipononivea.
Grow Boehmeria nipononivea, spin and dye with blessings by nature.
And then, the woven precious textile will be rinsed in the pure ocean.

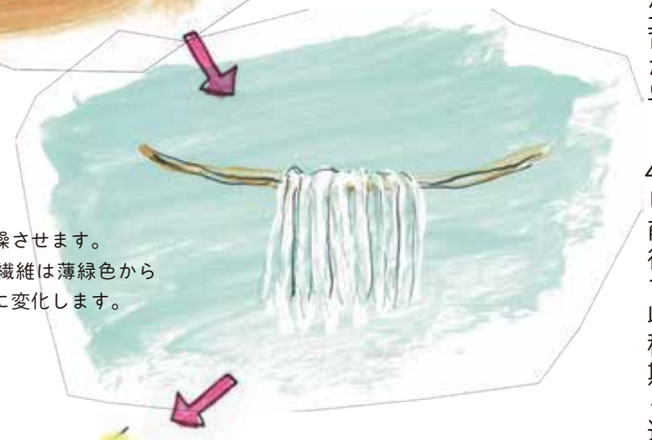
Lives of man and of nature are growing together.
With the proud of abundant and beautiful Island
Island's craftsmanship has been inherited.

# 自然の恵みから生まれる島の糸

## ◉糸を績（う）む（つむぐ）……八重山では苧麻の生育が早く、40日前後で収穫期を迎えます。

庭先で育った苧麻（ちょま）（ブー）を
刈り取ります。

葉を落とし、
苧麻の茎の外皮を
専用の器具でしごいて、
繊維を取り出します。

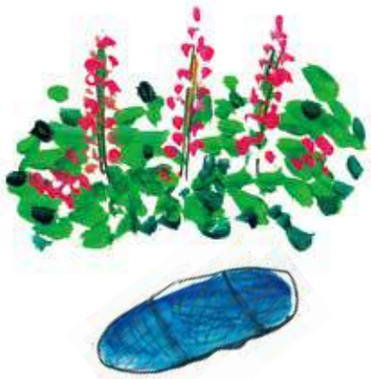


乾燥させます。
この間に繊維は薄緑色から
白色に変化します。

繊維を細かく裂いて
1本ずつつなげ、
糸を績んでいきます。

## ◉糸を染める……石垣島には糸を美しく染めるたくさんの植物が生息しています。これらの天然染料は、濃淡や色の掛け合わせによっても様々な色彩が生まれます。

〈例〉

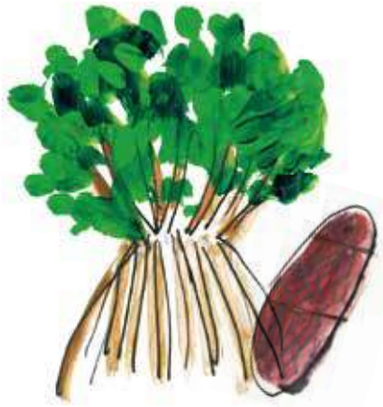


### 藍

八重山ではナンバンコマツナギと
タイワンコマツナギの2種類が
藍染め用に栽培されています。

### フクギ

防風林として
島のあちらこちらに植えられています。
樹皮や葉を使用します。



### ヤエヤマヒルギ

下流域のマングローブに生息。
樹皮を使用します。
※天然記念物のため、工事等の際に採取します。

### クール（紅露）

和名ソメモノイモ。
日本では、石垣島と西表島だけに自生。
イモの部分を掘り起こして、染料にします。

# 庭に生える苧麻を績み、地域・伝統をつなぐ

白保の織友
染織工房なわた

## 松竹 喜生子さん

### 島の暮らしの中にある織りの文化

島に生息する苧麻という植物を原材料に、手仕事で織り上げたものが八重山上布です。この島は苧麻の産地であったことから、琉球王朝時代、貢納布として主に白地の上布が織られてきました。

世の中がどんどん便利になって効率のよいものづくりが進められるなかで、昔と変わらずに自分たちの地域の植物から繊維を取り、植物染料で染め、伝統の手法で織り上げる——。先人たちがこの島の美しい自然から学び、養ってきた美意識と、丹念に受け継がれてきたこの伝統技術、それらのすべてを一人の作り手として次の世代に伝えていきたいと思っています。

今でもこの島では祭り行事に参加するために、ミンサー帯や八重山上布といった島の織物を着用します。大切な文化と共に、織物は島の暮らしに今も静かに存在しています。過去のものではなく、私たちの生活の中にある、ものづくりなのです。

もともと私が織物を始めたきっかけは、隣近所でおばぁたちが織るのを見て育ったことにあります。高校進学のために島外に出た時に、あらためて島に根づく文化のすばらしさに気がつきました。それで、20歳で戻って織りの勉強を始めました。

2年前に地元である白保で工房を始めたのも、いろいろな人に織っているところを見て、知ってもらいたいという想いがあったからです。織りの風景がすぐ身近にあれば、かつて私がそうであったように、若い人たちに「島に戻ったら、あれをやってみたい」と思ってもらえたり、チャンスを与えることができると考えています。

夢中になれる仕事を生まれ育った大好きな場所でできる。こんな幸せなことはない、といつも感じています。

### おばぁが績む糸をもらいに

15年ほど前に白保地域で織っている仲間を集めて「白保の織友」を発足しました。呉服店さんへおろす帯や着尺だけでなく、クラフトとして楽しめる織りもやろうということで、ポーチやブックカバーなどの商品を作って白保の日曜市で販売しています。

工房では、毎週月曜日にみんなで集まって苧麻を績んで（つむいで）います。苧麻はイラクサ科の植物で、家の庭先でよく育ちます。方

| | | | |
|---|---|---|---|
| 7 | 5 | 3 | 1 |
| | 6 | 4 | 2 |

1　庭先に育つ苧麻。

2.3　地域の織り手が集まり、糸績みを行う。

4　植物染料で染められた糸。

5.6.7　機に向かって織る松竹さん。

島の手仕事は、美しい自然と共にある。潮の干満差が最も小さい、小潮の日に行われる海ざらしは、染色した絣（かすり）の色を止め、上布の白い地色をなおも白く仕上げる。

言でブーと言いますので、糸績みはブーウミとも呼ばれます。ブーウミのメンバーは、全員が織り手です。今は苧麻の糸を績む人が大幅に減り、思いどおりに糸が手に入らなくなってしまいました。昔は、家族に八重山の着物を着せるために各家庭で糸を作り、それを織り手に渡して織ってもらっていたものです。今では誰かのために糸を績むという話もほとんど聞かなくなってしまいましたね。それで今後のことも考えて、織り手である自分たちでも補っていこうと、ブーウミを始めました。根気のいる作業ですが、ゆんたく（おしゃべり）しながら楽しんでやっています。

白保で糸を績んでいるおばぁは、現在3〜4人くらいでしょうか。みなさん90歳前後です。どのおばぁも昔は織り手でした。織っている中でも糸を績むことがあるので、自然とできるようになります。私が糸をお願いしているのぶおばぁには、「おばぁの糸がないと本当に困るのよ」と、いつも伝えています。そうすれば、家族にもおばぁの糸が重宝されていると、知ってもらえる。おばぁも「孫に小遣いをあげようね」と言って張り切ってくれます。そんな風にして昔から地域はつながってきたんですね。

おばぁの糸の太さ加減で、帯にも小物にもなるので、これは誰々の糸で作っていますよ、といった風に工房でも紹介をしています。

私はこの仕事が大好きです。いつも次はどのようなデザインにしよう、こんな工夫をしてみようと考えてワクワクしながら織っています。私自身が楽しみながら、そのすばらしさを伝統の技法、技術と共に次につないでいく。それが私の育った大好きなこの場所に貢献できることだと思っています。

# 土と手仕事

Soil and craftsmanship

島のごはんには、
島の器がよく似合う。

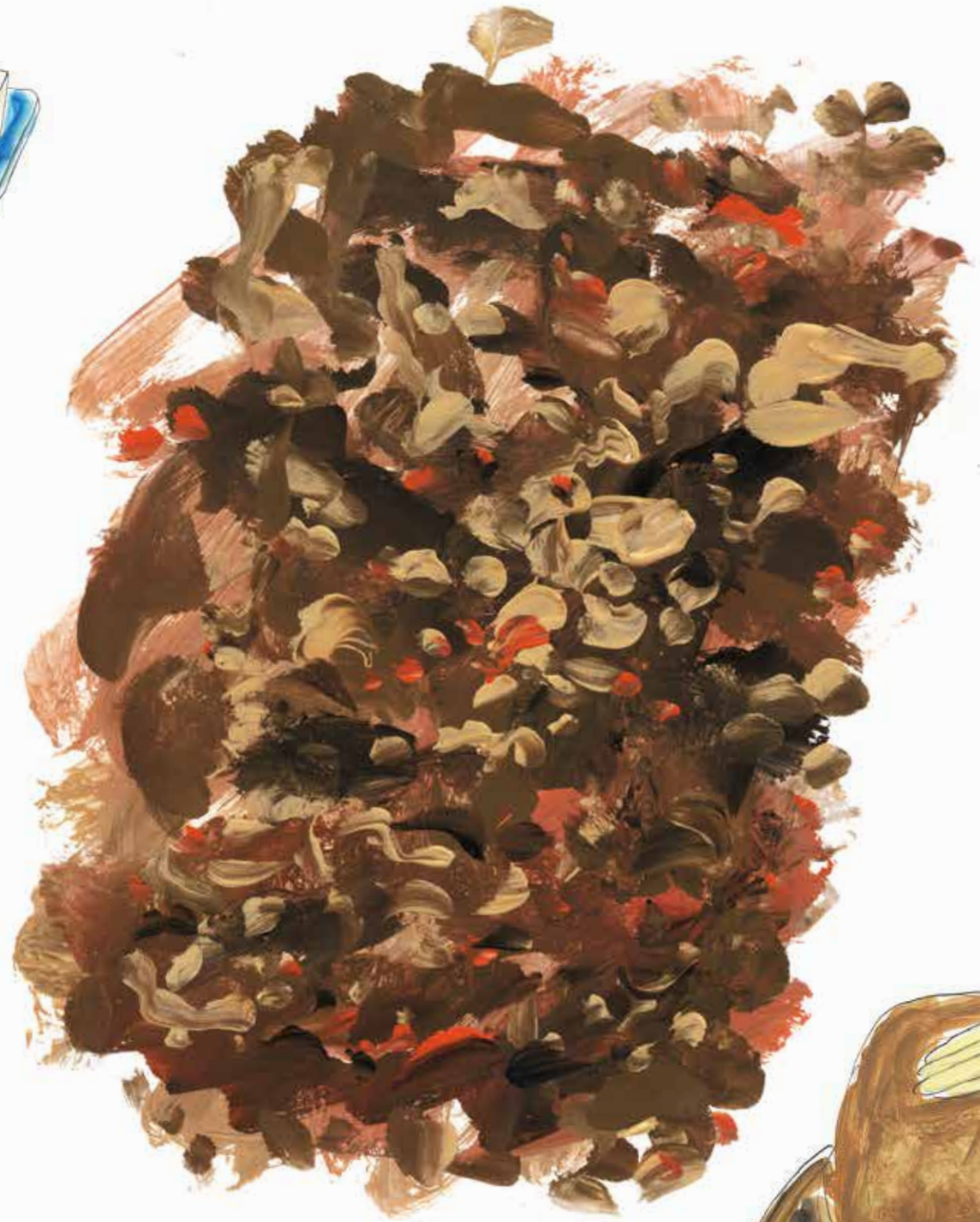
石垣島は陶芸家の心をくすぐる
バラエティ豊かな土の宝庫。
その数に負けないくらいの
個性あふれる生活芸術家たちが
全身で島のインスピレーションを受けながら
今日も、ろくろを回しています。

自由で、ユニークで、あたたかい器たちに
島の恵みを盛りつけて
幸せごはんをいただきましょう！

Dishes of the Island look good
especially on the Island's made potter's ware.

Ishigaki Island is like a treasury full of variety of soils
which catches potter's hearts.
There are many "life" artists in Island as many as the variety of soils.
The unique artists are getting inspiration with all their senses
and still turning potter's wheels to make their works today.

Now, shall we serve blessings from Island
on unique and warm potter's wares?
And let's enjoy dishes of happiness.



# 自然な流れの中にある半農半陶の暮らし

アンパル陶房　宮良 断（みやら だん）さん

## 独自の発展を遂げた八重山の焼き物

琉球王朝時代、八重山にはまだきちんとした焼き物はなく、あったのは瓦を作る技術くらいでした。当時、陶器類は沖縄本島から船で運んできていたのですが、お金はかかるし、持ってくる間に割れるしで、非常に効率が悪かった。

そうしたなか、1720年代に沖縄本島から壺屋焼の名工、仲村渠致元（なかんだかりちげん）が石垣島に派遣されて、4年間かけて技術指導を行いました。これが八重山の焼き物の始まりです。

狭い島ですから、その中で作り続けているうちに独自の進化といいますか、形がいろいろと変化していきました。また、沖縄本島は経済的に追い詰められたりして、昔ながらのやり方ができなくなっていったということがあったのですが、石垣の場合はそこまで影響を受けなかった。それでわりと古いスタイルが残っています。このように、沖縄本島とは全く違う形で発展していったという観点からみても、この島の陶芸は珍しい、面白いところがあると思います。

八重山の焼き物に共通する特徴は、造形の力強さやたくましさ、それに全体のバランス感覚でしょうか。博物館に行くと「八重山焼」のコーナーがあって昔の作品が並べられていますが、例えば花瓶のようなものや酒瓶は、下の方がぐっと広がっていて、そこからすっと上に伸びている。メリハリがある印象です。沖縄本島のものは、ラインが柔らかくて優しい、沖縄の人たちをそのまま形にしたような感じなんですね。それに対して、八重山はちょっと角が立っているというか、主張が激しい（笑）。

## 見えてきたのは、先人たちのチャレンジ精神

こうやって八重山の焼き物について話をしていますが、実はだいぶ前にこの島の陶芸の歴史は途絶えています。なぜかはあまり分かっていませんが、技術の伝承や、誰にどのように売られていたのかなど当時を知る資料はほとんどありません。とにかく手掛かりは残されている当時の作品と、わずかな情報のみです。

僕自身、石垣で生まれ育ち、今もこうしてここで暮らしていますが、この島の伝統的な技法や技術を受け継ぎ、当時と同じものを作っていきたいと思って作陶しているわけではありません。ただ、素朴で稚拙なものづくりで終わってしまいがちな島の中で、これだけ美しい造形物を作れたということに、強く魅かれました。それでいろいろと調べてみると、当時の人々の美意識や、とにかく新しいものを生み出そうとする向上心、アグレッシブな姿勢をひしひしと感じ取ることができたんです。文化的で豊かな島に暮らしているという実感と共に、先人たちのそのチャレンジ精神、心構えを引き継いでいきたい、そう思うようになりました。

僕の持論なんですけれども、意識し過ぎてしまうと、それらは文化や伝統になりにくいと思うんです。たとえ、これまでとは違う新しいことをやったとしても、しっかりと地に足をつけて生きることを意識していれば、結果、自然に足元の文化と重なり、未来へとつながっていく。そんな風に時代、時代で変化しながら受け継がれていくのが文化であり、伝統なのではないか、と僕は思っています。

## 農業もする、陶芸もする

家業である農家をしながら、作陶を続けています。どちらがいいとか、優先順位があるとかそういうことではなく、焼き物もやるし、農業が忙しければそっちを一生懸命やる。本当の意味での半農半陶ですよね。こういう自然なスタイルに身を置きながら生活をしていると、ふっと降ってくるんです。発想だとか、インスピレーションみたいなものが。お互いがよい影響を及ぼし合う、すばらしいコンビネーションだと思っています。

## 群生する個性、それが石垣の陶芸の面白さ

現在の石垣の陶芸で一番面白いところは、必ずしも地元の人ばかりで固まっていない、ということです。実際、地元出身の人はほんの数名で、他はみなさん、この島に移り住んできた人たちです。ですから出身地も、目的も、考え方もバラバラ。だけれども、時々一緒に展示会をしたり、グループ展をしたり。変に派閥があるとかそういうこともなく、緩くつながっている。個性的で自由。これが今の石垣の焼き物の一番の面白さだと思うんです。そういうところはこれからも大事にしていきたいですね。

# 島を見つめ直し、新たな魅力に気づく

南島焼　奈美（なみ） ロリマーさん

## 作陶の地を求めて石垣島へ

陶芸を始めたのは、京都にいた学生時代です。国内でさらに学んだ後にニュージーランドに渡って焼き物の勉強をし、戻ってからは備前焼を習得しました。その頃に主人と出会いまして、結婚を機に日本のどこかに自分たちの窯を持とう、ということになったんです。それで、南から北まで作陶に適した地を探す旅に出た、そのスタート地点がここ石垣島でした。ところが、博物館で琉球王朝時代の焼き物である八重山焼に主人が一目ぼれして、どうしてもここで同じものを作りたい、と。それで結局、そのまま石垣島に拠点を置くことになったんです。まだどこも見ていないのに(笑)！　それが37年前になります。

実際、暮らしてみると天気もいいし、焼き物に適している風土でした。最初は、吉原に住んでいたのですが、粘土を探し歩いていたところ、川平の集落の人が「自分ところの使っていない土地で白い土が出るよ」と、教えてくれました。それで自転車にキャンピング道具を積んで、ここにやってきたんです。

当時、この辺りは何もなかったですね。当然、知り合いもいなくて。それでもいざ窯を作ることになったら、周辺の方々がみなさん、手を差し伸べてくれました。ある時、窯の上を覆うための藁（わら）を足で揉（も）んでいたら、80歳くらいのおじいさんが水牛を連れてきてくれて。牛の大きな足で手伝ってくれたものだから、あっという間に終わりました。あれはすごく嬉しかったですね。

## 器のモチーフは島の暮らしそのもの

まずは1年と思って住み始めて、1年過ぎたら次は3年と、そうやって積み重ねてきました。その間に海に潜ったり、山もたくさん歩きました。そんな風に過ごしていたら、あぁ、この島は凄いな、すばらしいなと心から感じるようになっていったんですね。当時は幾何学模様のモチーフを描いていたのですが、こんなに豊かな島にいるんだから、島にあるものを描きたいと思うようになって。それで実際の花や動物をスケッチしているうちに、島のモチーフにすっかりのめり込んでしまったんです。

器は飾りではなく、使ってこそだと思っています。ですからこんなものを入れて食べようとか、いろいろ思いながら使ってくれたらそれが一番嬉しいです。飾っておきたいという方には、「なんぼでも作りますから、ぜひ使ってください」と言います(笑)。以前、私が作ったお皿を20年使っているという方がそれを持って訪ねてくださいました。もう絵なんか消えてしまっているんですね。原形はなかったけど、そこまで使っても、まだ大事にしてくれるのかとすごく感激したのを覚えています。

年に一回、市内で開催される「石垣島やきもの祭り」は7年続いています。普段はそれぞれに活動している作り手たちが集まって、お客さんにどうやって喜んでもらおうかと、一生懸命企画を考えています。

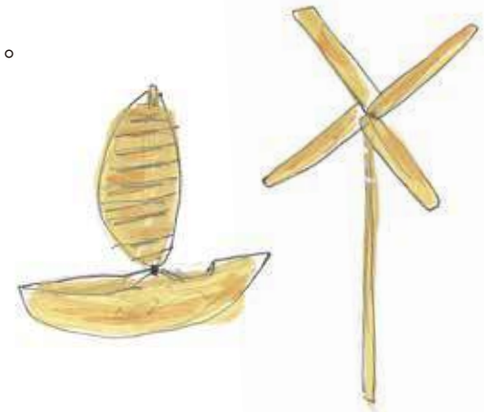
30年以上この島に暮らしていますが、ずいぶん当初と島の環境は変わりました。それでも日々、たくさんの感動や発見と出会うことができます。これからはまたもう一度、ゆっくりと島を見直して、新たな魅力や生命力を描いていきたいですね。

奈美さんの工房は川平の豊かな森の中にある。季節と共に移りゆく自然に、日々、インスピレーションを受けながら作陶に取り組む。

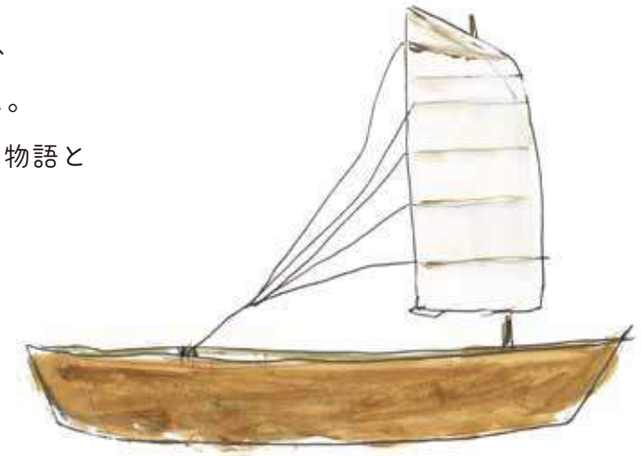
# 暮らしと手仕事

Life and craftsmanship

小さい頃に遊んだ葉っぱの舟や草編み玩具。
作り方、覚えていますか？
もっと速く、もっと上手に。
創意工夫に明け暮れた玩具づくりは
島の手仕事はじめ！



遊び道具を一生懸命作ったように
使い勝手がよくて、風土に合った暮らしの道具は
すぐそこにある植物から生まれ、
生活の中で磨かれていきました。
その一つひとつに島の暮らしの物語と
感謝の心が宿っています。



Do you remember
how to make a leaf boat or grass woven toy
which you played with in childhood?
Faster and better.
Making toys has encouraged
originality and ingenuity.
So it was the start of Island's craftsmanship!

Like when you were trying hard to make a better toy,
easy-to-use and well suited to local climate housewares are
made with vegetation grown nearby
and has been polished in daily life.
Each one of the items has a story of Island's life
and has heart of gratitude.

# 平和を願いながら作り続けて58年

マルタ工芸　田場（たば） 由盛（ゆうせい）さん

## 面づくりを仕事に

毎朝6時から、夕方5時頃まで。お面を作り始めて58年、今年で84歳です。ここ2か月くらい前までは床に座って彫っていたのですが、腰が思うようにいかなくなりまして、今はこうして椅子に座ってやっております。

かつては私のように面づくりを専門に行う職人はおりませんでしたので、お祭りで使う面はその地域の中で木工仕事の得意な人が作るのが一般的でした。大きな竹の皮をはぎ取ってきて、目や口を描く。２００年くらい前の古い面が博物館に残っておりますが、これも素人の方が作ったものです。

お祭りの面は、何十年も使い続けます。大川のものを20年ほど前に代えたのですが、それが１００年ぶりでした。現在は私が作った面が使われています。今では沖縄本島から与那国まで、ほとんどの面を作っています。獅子頭（がしら）も地域によって形や色が変わったりしますので、それぞれの地域に伝わる獅子に似せて彫っています。最近では、結婚祝い、新築祝い、人事異動で転勤なさる方への餞別（せんべつ）として贈られることも多いです。

私は、もともとは家具屋でした。しかし日本に復帰すると、輸入した家具がバンバン入って来るようになったんです。それで、これまでどおり島の木材で家具を作って売っていては生活が成り立たなくなる。そう考えて、面づくりを始めました。あの当時は、1つ彫るのに3日かかりましたが、一生懸命に試行錯誤を重ねるうちに1日で作れるようになりました。

やはり彫る作業が一番難しいですね。彫っていると途中で節が出てくることがありますが、そうするともう商品にはなりません。せっかく彫ってきたのが水の泡。ですから、木の中が見えるレントゲンのようなものがあればいいなぁと、時々思うことがあります。

## 健康の喜びと共に手仕事を続ける

お祭りごとには地元の木材が使われます。アンガマ面は、石垣島の海岸線に多く生息するハスノハギリを使います。木材は日に当てると割れてしまうことがありますが、この木はそういった干割れをしにくいのが特徴です。以前は森林組合に切ってもらっていたのですが、腰を鍛える意味で、市に許可を得た上で今は自分で切っています。切るのはいいんです。でも、担ぐのが大変。ひと苦労ですが健康のためにやっています。家でこうやって、もくもくとやっているから楽そうに見えるようですが、この仕事も大変です。切るところから作るまで全部一人で行っていますから。

それでも長年続けてこられたのは、みなさんが愛用してくださることと、健康であるということでしょう。戦時中、避難した際にマラリアにかかったのですが、その時に九死に一生を得まして今日までこうして生きています。母は同じ病気で52歳で亡くなりました。アンガマの踊りも、戦争が始まると数年後に途絶えてしまいました。平和でないと面づくりもできないわけです。そんな想いも、この仕事を始めたきっかけの一つでした。ですから、今も平和を願いながら作り続けています。

来年85歳になると、市長から賞状をいただけるんです。石垣市でこの生年祝いが始まった昭和25年当時は、市内で85歳を迎えた方は6名しかいなかったそうです。けれど、今年は２００名以上いらっしゃる。医学の進歩はすばらしいなぁと感じております。戦後まもない頃は人生50年と言われ、還暦になったら盛大に祝いをしたものでした。それが今では平均寿命が80歳を超えている。いずれは１００歳の時代が来るんじゃないかと思っています。ですから、これからも頑張らないかんですね。

（上段）豊年祭などで使われるミルク神の面。豊穣をもたらす来訪神とされる。
（下段）石垣地方の伝統行事アンガマで使われるアンガマ面。あの世からの使者ウシュマイ（おじぃ）とンミ（おばぁ）らの仮面をつけて家々を訪ね歩き、踊りなどで祖先の霊を供養する。

# 豊かな時代における手仕事の価値

やちむん館・工房 紗夢紗蘿（さむさら） 池原（いけはら） 美智子（みちこ）さん

## ライフスタイルと共に変わりゆくもの

今は作り手が減って、民具生産の危機が近づいています。クバ笠を作っている人は一人か二人しかいないし、芭蕉布は小浜のおばあちゃんが一人だけ。この間、二反仕入れたのですが、これもいずれは途絶えてしまうかもしれません。経糸（たて）、緯糸（よこ）共に芭蕉で織られたものは、今も沖縄本島の喜如嘉（きじょか）で作られていますが、八重山ではもうこの先、作り手は現れないかもしれません。

私が民具に本格的に取り組み始めたのは20数年前です。その前は織物をやっていました。昔は反物を織ったらまずは着物に仕立てて、よそ行き用にして。その後、普段着に下ろしてそこからさらに寝巻きにして、子ども服にリメイクして、おしめにして、雑巾にして……という具合にして布の一生が終わる。そのくらい手織りのものを大切にする気持ちがありました。

今は着物が洋服に変わり、どんなに美しくてよいものを織ったとしても、一部の人にしか使用されなくなってしまった。実際に踊りをやっている人や着物に興味がある人、文化を残していこうと取り組んでいる人たちだけのものです。

もし、次の世代の人たちが麻や芭蕉が南の島の気候にどれほど合った布地かということを知り、それを誇る気持ちが育てば、愛用できる服など新しい形で島の知恵、島の宝をバトンタッチしていくことができるかもしれません。

## ものごとの価値を自ら選択していく時代へ

この工房では、アダン葉草履（ぞうり）やあんつく、円座、枕、ござなど生活必需品を扱っています。材料となるアダンや月桃（げっとう）などは、ほぼ敷地内で育つ植物を使用します。全工程を習いたいからといって、沖縄本島や台湾、他の国からも、何日も泊りがけでやってくる方もいるんですよ。

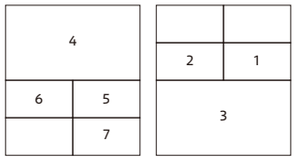
今は豊かな時代です。でも、いつの日か何もなくなる時がくるかもしれない。そしたら、自分の身の回りのものは自分で作らないといけなくなる。いわゆる生活民具ですよね。飾りではなくて、実際に使ってきたもの、今使っているもの、これからも使うはずっていうもの。これらをきちんと残していかなくてはいけないと感じています。

私が育ったのは農家なので、お米や醤油、みそ……口に入るものはみんな作っていました。おやつもその辺になっている桑の実やグアバとか。おいしかったですね。今は外からいろいろと入ってきて何でもそろうけれども、こういう豊かな時代だからこそ、自分たちの周りにある優しくて素敵なものにもう一度気づけるチャンスなのではないかと思います。

うちの息子はもうすぐ30歳です

が、彼らの仲間は昔からのものが好きでね。若い世代の子たちがこうして島の内側に目を向けることができるのは、広い視野をもって自分たちでいろいろと考えたり、選んだりできる時代にあるからでしょう。だから、今、何かが変わっていくとしたらちょうどいい時期なんじゃないか、と感じています。

手仕事や民具に興味がある人だけでなく、これからは島の子どもたちにも身近な植物や島の生活道具、民具のことを教えていきたい。実際に身の回りに生えている植物に触れて、ものを作り、そして島のことを分かってもらう。そういう経験が必要です。ですから例えば授業の一環とするなど、教育の立場からこうしたことに取り組んでいくことができたらいいなと思っています。







1.2.3　工房の敷地内に育つ月桃（げっとう）などを材料に、かごや円座を編む。

4.5.6　工房内に並べられた民具。

7　島の大工、戸眞伊さんが作製した、糸を入れる用具「すくい」（非売品）。

# 長く使い続ける心を絶やさずに

南嶋民芸・南嶋民俗資料館　崎原（さきはら） 毅（つよし）さん

## 身近な植物で作る郷土玩具

私の場合は民具を作る傍らで、好きで郷土玩具もあれこれ作っています。玩具も商品として販売をしてはいるのですが、もともとこういったものは、子どものためにおじいやおばぁ、親が身近な植物で作ってあげたり、一緒に作ったりしてきた素朴なものです。

私が作る玩具の中では、クバ舟が人気ですね。クバの木の芯をくり抜いた船体に、葉とその葉脈を帆に見立てて取りつけます。この帆のアイデアはオリジナルです。実は、クバでうちわを作る時に出る端切れなのですが、転用してみたら本物の帆みたいになりました。自然の葉っぱを乾燥させただけですが、結構重いんですよ。50年くらい前まではこの辺りも道路が簡易舗装だったので、雨が降ると水たまりができて。そこにこの舟を浮かべて走らせて遊んだものです。

## 今も変わらぬ民具のぬくもり

民具は、それぞれの家でおじいおばぁが作っていることが多い。みんな、自分のペースでたんたんとやっています。

海人（うみんちゅ）の中には、かごを作る人もいます。川平で聞いた話なんですけど、天候が悪い日は海に出られない、かといって遊んでいるわけにはいかない。それで、内職として民具づくりをしていたそうです。しかし、それも昔の話。今、民具を作る人はずいぶん少なくなってしまいました。

若い頃に民芸店を立ち上げたのですが、当時は島内を回り、こうした民具を買い取って販売をしていました。特に作り方を教えてもらうことはなかったのですが、一軒一軒立ち寄るうちに、自然と見て覚えました。作っている傍らで1、2時間おしゃべりしてましたから（笑）。

民具や郷土玩具の魅力は、その温かみでしょうね。現代人は、石油製品に囲まれているから、安いし、使い捨てることが文化になっているんですよね。電気製品なんて特にそうじゃないですか。昔の井戸のポンプは壊れないですよ。サビついて、ガタガタしても動いています。

その反動なのか、みなさん素朴なものを求めているのかもしれません。クバ舟は最近、「地域のお土産物」として雑誌に取り上げられて、東京からたくさん注文が入ってきました。材料を探すところから始めるわけだから、結構大変なんですけどね。嬉しい話です。

自然の恵みから生み出されてきたものを、修繕しながら長く使い続ける。その心をこれからも大切にしていきたいと思っています。

| | |
|---|---|
| 1 | |
| 3 | 2 |
| 5 | 4 |

1　崎原さんオリジナルのクバ舟。

2.3　民具や郷土玩具の材料となるアダンは、葉のとげを取り除き、天日で乾燥させて使用する。

4.5　沖縄で昔から作られてきた琉球張子。

# 感謝の念と共に受け継がれる三線（さんしん）の精神

八重山（やいま）三線工房　新城（あらしろ） 弘行（ひろゆき）さん

## 親から子へ 弾き継がれる伝承

島の人たちにとって、三線（さんしん）は一生ものなんです。家宝というか。10年、20年どころではなく、親から子、さらにその子へと何代も何代も1本の三線が大切に弾き継がれていきます。ある時、弾き手が途絶えてしまったらどうするのかというと、「天に返す」という意味で三線を天井裏に置くんですね。感謝の気持ちを込めて。それで時折、古い家を解体した時に屋根裏から三線が出てきて、また弾きたいからと修理を依頼されることもあります。

こうして長く受け継がれる家の宝だからこそ、伝統的なしっかりしたものを作らなくてはいけない、絶対に廃らせてはいけないという気持ちで22年、一心に作り続けてきました。技術についてはまだまだ、これっぽっちも満足したことはありませんし、一生学び続けなくてはいけないと思っています。

## 島の木が生みだす 美しい音色

1本の三線を作るのに1か月以上かかります。軸となる棹（さお）（ソー）を削るだけで4、5日ですね。それから漆を塗ったり、胴の皮を張ったりすると、1本完成させるのにそのくらいはかかってしまいます。ですから月平均で5本くらい。どんなに頑張っても6本か7本くらいしか作れません。注文を受けてから製作しますので、半年待ちになってしまうこともざらです。

材料はすべて島の木、島材で作ります。一番代表的なものは八重山のクロキですが、今は伐採禁止になっているので、希少価値が高く、全く手に入らない。成長も遅い。しかも、7年以上乾燥させないと削り出せません。切り倒したばかりの木だと、ねじれたりしてしまう。十分に乾燥していることが大事なんです。棹の部分には、他にユシギ（イスノキ）がよく使われますが、これは乾燥するのに30〜40年かかると言われています。

島材は硬いのでヤスリを使い分け、木の状態を確認しながら半年以上かけて少しずつ削っていきます。それで、大丈夫だと思った時に仕上げていくんです。実に大変な作業です。それでもクロキやユシギなど島材を使いたいと思うのは、木の締まり具合や密度が普通の木とだいぶ違うからでしょう。島の木は、音の響きと伸びが輸入品のそれとはやはり、全く違うんです。

ユシギは、築70年くらいの家を取り壊す時に見つかります。解体する家があると聞きつけると廃材を譲ってもらいに出かけるのですが、大体3軒に1本くらいの割合で、三線に使えるよいユシギが見つかります。これは人から聞いた話なのですが、昔の人はいつか家を取り壊す時に三線が作れるようにと、そのためのユシギを家を建てる際に何本か入れておいたらしいんです。しかし時が経ち、今の人はどういう木で三線が作られるかを知らない。だから大概は、大事な宝がそこにあることに気づかずに他の木と一緒に廃棄してしまうんです。

## 三線に記された 先人からのメッセージ

三線には、それぞれの部位に深い意味があります。例えば、胴のつけ根には「野坂」という部位があります。棹の先端部分が「天」。そして、「野坂」と「天」の間は「野」と呼ばれます。これは、崖（部位名：爪裏）から爪を立てて這い上がって野坂を上り、野をかき分けて進んでいけば、天までたどり着きますよ、だから頑張りなさい、と。そういうメッセージが込められています。

また、胴の内側には「心（しん）」という部位があります。漢字のとおり、心（こころ）ですね。完成すると見えなくなる場所ですが、胸の内で心に火を灯すように、最初に作るのが「心」なんです。三線づくりは心を入れることから始まります。

糸は3本の白い糸。これは織物をイメージしています。その糸を納めるためにくり抜かれた部分が「糸蔵」で、これは一生懸命頑張れば蔵が建ちますよ、そういう意味合いがあるんです。しかし現在、これらを知る人はほとんどいないでしょう。

私自身も、最初は何気なく作っていたんです。お客さんに「この部位の名称はどういう意味か」と聞かれても、答えられなかった。それで、どうにかして知っている人はいないか尋ね歩きました。昔の三線の本を持っている人がいれば、三線と交換してでも、この本がほしいとお願いしたものです。1本30万、40万もする三線を、ですよ。この本と三線を交換してくれ、頼むから交換してくれ、と（笑）。そういう風にして、ちょっとずつ勉強していきました。

## 15年、20年。人生をかけた 手仕事との出会い

石垣島で現在、生業として三線を作っているのは私一人です。この仕事で生活できるようになるまでに15年かかりました。その間は、バイトや事業をしながら生計を立ててきました。諦めなかったのは、この島のすばらしい文化を残していきたい、絶やしてはいけないという気持ちが大きかったからでしょう。他の仕事をしながらも、いつも三線のことばかり考えていました。

作り方を教えてほしいと、弟子入りする人もいます。しかし、朝から晩までひたすらコツコツと作り続ける作業に我慢ができなくなり、みんな途中で投げ出してしまいます。本気でやろうと思ったら15年、20年、いやそれ以上、人生をかけて作り続けなくてはいけません。覚悟をもってこの伝統文化を引き継いでくれる人が現れてくれたら、本当にそれに越したことはありません。

# 新たなスタイルを創り、技術を継承する

吉田サバニ造船　吉田（よしだ） 友厚（ともひろ）さん

## 漁のために造られたサバニ舟

丸太をくり抜いて造る丸木舟（くり舟）が主流だった太古の時代、くり抜いた内側はすべて木くずになっていたんです。だからロスが多かった。それで漁船造りが盛んになるにつれて大きい木材が足りなくなってきたものだから、木材を有効に使おうと、継ぎはぎをして造り始めるようになりました。これが後に「本ハギ」と呼ばれる、伝統的なサバニ舟技法の始まりと言われています。

琉球王朝時代にあたる1700年代後半の文献には、継ぎはぎで造ることを推奨する記載が残されています。その後、木と木を継ぎ合わせる際に鉄釘を使わず、かすがいの役目としてのフンドウと竹釘を用いる「本ハギ」の技法が沖縄で生み出されました。かつて丸太をくり抜いて造られたその走行性を再現したこの技法は、現在も沖縄の伝統技術としてサバニ舟造りの基礎となっています。ですから、舟の構造自体は昔から変わらず、造る技法だけがこの200年くらいで進化した、ということなんです。

型や船底の形状などは地域や漁法の違いから微妙に異なっていったと考えられています。糸満では網を使った漁が主流なので、舟が止まった状態で作業しやすいように底がわずかに平らに造られています。僕が造っているのは宮古の池間島で造られていた型に近く、船底が普通のボートより丸い。だから止まった状態だとぐらつぐら。乗りにくいという人も多いのですが、外洋のうねりにはものすごく強いんです。波が来た時に平底だと波と一緒に揺れてしまうのですが、丸底だと揺れにくい。さらに波を切って走ると、すごく安定します。

サイズは大きいもので9メートルちょっと。最初、小さい舟で練習すれば、大きいものでも簡単に操作できるようになります。

## 舟を造り始めて

出身は東京です。もともと海が好きで、木工が好きでした。12年前にここ石垣島に移住してからは、農業をしたり、海に潜って魚を獲ったり、いろんな仕事をしてきました。しかしある時、日々の仕事に追われる中で自分の暮らしや生き方、目指す方向性を見失い、行き詰まってしまったんです。何を求めてこの島にいるのだろうか、と。

そんな時にふと、白保に住むサバニ大工 新城康弘さんが引退するけれども後継者がいない、という話を耳にしました。いてもたってもいられず訪ねてみると、新城さんは僕の話を聞いてくださって、その場で「材料はあるけど造るか？」と（笑）。嬉しかったですね。それで造り始めることになりました。5年ほど前になります。

実は初めは1艇、自分のために造ってそれを漁や遊びで使おうと思っていました。ところが、新城さんの隣で造っているうちにすっかり虜になってしまったんです。当時はまだサバニ舟に乗ったこともなかったけれど、60〜100年もつといわれる舟の力強さと、先人たちの知恵の塊である造船技術をこんなに身近に習っている、ということに大きな手ごたえを感じました。さらに、自分で造った舟に初めて乗った時、何ともいえない深い感動を覚えたのです。

やがてサバニ大工として暮らしていきたいと本気で考えるようになりました。そのことを新城さんに伝えると、「3艇は造りなさい」と言われました。「3艇造る間に船大工としての失敗をすべてするだろう。その失敗を踏まえた上で、4艇目から船大工を名乗りなさい」、と。実際、新城さんの指導のもとで3艇造ったところで、知り合いから受注が入り、造船業を立ち上げました。

1艇は観光のための船。伊良部島で観光業を営んでいる人が、モーターボートではなくサバニ舟を活用したいからと、お話をいただきました。

もう1艇は、竹富島の青年からの依頼です。「おじいたちと僕ら、孫たちが遊ぶために造ってほしい」と。話を聞くと、今80代、90代の方が若かった頃、由布島や西表島まで田んぼを作りに帆かけサバニ舟で行っていたそうです。番小屋を作って、交代しながら2か月間くらいかけて収穫したものをサバニ舟に積んで戻ってきていた歴史があり、今では入れなくなってしまった「なごみの塔」も、サバニ舟が帰つ

| 2 | 1 |
|---|---|
| | |

1.2　2つの三角形がくっついたような形状をしたフンドウ。木と木を継ぎ合わせる、かすがいの役目を担う。

てきたかを目視するために作ったものらしいです。舟が見えると鐘を鳴らし、みんなでリアカーを引っ張って迎えに行ったという話を聞きました。

## 船大工というライフスタイル

木造のサバニ舟を使った漁業は、時代と共にほとんど見られなくなりました。ですから、ただサバニ大工になりたいと思っても、そうそう注文が入ってくるわけではない。そこで、自分でもサバニツアーを始めることにしたんです。お客さんを乗せて、楽しんでもらう中でまずはサバニという文化を広めようと考えたんです。僕がツアーの運営をして経済的にうまくいけば、誰かが同じようにやりたいと思うはず。「本ハギ」のサバニ舟を石垣島で造っているのは僕しかいないので、舟と一緒に乗り方や風の読み方のノウハウを教えてあげよう、と。そうなった時にあちこちから造船の依頼が来たらいいな、と考えました。それで、独立してからは造船とツアーを並行してやっています。

僕は船大工として生活していきたいと強く思っています。そのために、サバニを広める活動もしています。業界では、まだまだ若造です。どのような状況でも、造り続けること。そこだけは外さないように、どんなに二日酔いの日でも（笑）、手を動かし続けたい。

はるか昔から生活の中で磨かれ続けてきたこのサバニ舟の技術と先人たちの想いを、今の時代を生きる僕らしく、大切に、力強く次の世代につないでいきたいと思っています。

Nature and Craftsmanship of the Island

石垣市商工振興課　2017年3月作成